

---

# 東方餓狼死狂伝

モーディス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方餓狼死狂伝

### 【Nコード】

N 8 7 6 4 L

### 【作者名】

モーデイス

### 【あらすじ】

空手団体：北辰館の一員、堤城平。彼は、丹波文七という猛者に負けて以来、今までよりも過酷なトレーニングを己に課していた。ある日の夕方、彼が無心にランニングしていると……？

## 幻想郷に呼ばれた餓狼

彼は、森の中にいた。

それがいつからだったのか。

それさえも、彼にとって定かではない。

彼は、いつも通りランニングをしていた。

体力を落とさぬため、そのためのランニング。

己に課したメニューを忠実にこなす。

ただひたすらスティックに、彼はそうしてきた。

だが、どういうことだろうか？

そこは彼のランニングコースには存在しない森だった。

まあ『いつの間にか森にいた』という彼の感性にも疑問を持つべきだろう。

とにかく、事実として彼は森にいた。

見も知らぬ、未知の森に。

## 第1話『幻想郷に呼ばれた餓狼』

そこが森だと気付き、彼は足を止めた。

ランニングの途中だったため、体のクールダウンも兼ねて流してから。

安物のスニーカーが踏みしめるのは、やわらかな土の感触。

『森で走るのもいい練習になるかもな』と思うのは、彼だからだろう。

しかし、彼も一応人間だ。

そこが見覚えのない土地と分かり、軽く混乱した。

というよりも、混乱していたからこそ危機感を感じさせない思考を巡らせたのだ。

そう、軽くである。

『大変なことになっている』という現状をある程度把握した彼は、とりあえず森から出ることにした。

早く森から抜け出して、通信手段なりを確保せねばならない。

もし県外などに来ていようなものなら、会社に一報入れる必要がある。別段彼が必要な仕事もないが、だからといって無断欠勤していいわけではないのだから。

……ここまで来て、己の身を案じない人間も珍しい。

とにかく、彼は現状を開くために歩くことにした。

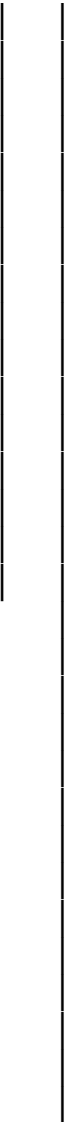
危険は承知だが、もともと森の中に来た経緯さえはつきりしていないのだ。

それに、彼にとって『多少の危険は危険ではない』のである。

正直なところ、クマくらいは殴り殺せる自信があるような人間だ。

しかし、彼は重要なことを知らない。

人間以外の、彼の想像を超える生き物が、ココには存在しているということを。



少だけ森の中を歩いて、やや開けた土地を目の端に入れたところだった。

地面が……それなりに大きな湖の湖面が、太陽光を反射して輝いている。

彼の地元ではなかなか見られないような、幻想的な光景だ。

そして、彼はココに来て初めて人間らしい者に遭遇する。

「あれ？　メイドじゃない人間がいる！」

と大声で言って指をさす人物のは、堤の目から見ても少女にしか見えなかった。

大して背丈もなく、小柄な彼と比較してもまだ小さい。

その立ち振る舞いからも、少女らしさ、というものが滲み出ている。水色を基調としたワンピースは、森の中にも映えている。

清潔感是十分にあり、森の中にしては小奇麗な恰好であった。というのが、堤城平が彼女を最初に目にした時の感想である。

至って視力に問題のない彼だが『メイド』という聞きなれない単語には首をかしげた。

一度、会社の食堂でつけっぱなしだったＴＶで特集を見たことがあるようなような。

その程度の知識であるため、彼はすぐに熟考するのをあきらめた。

その少女は、無防備に堤に近寄ってくる。

普通だったら、空手着を着た筋骨隆々とした男には近づいてこないだろう。

しかも、つぶらな瞳と小さな体躯のおかげで、余計不気味に見えるのだ。

そんなことくらいは承知している堤であるからこそ、逃げられても不思議はないと覚悟できていた。

もちろん、逃げられたら付かず離れずの距離をとって追跡するつもりだったが。

とりあえずその心配はないとわかって、堤は幾分か警戒を解いた。

「うわ、汗くさっ！ 水浴びくらいしなよ〜！」

それよりも、彼にとって重要なのは。

日本人からはやや離れた造形をした少女が日本語を話せるということだ。

森の結構奥に来るくらいなのだから、地理にも明るいに違いない。であるなら、道を聞くことができるのである。

「すまないが、人里に行く道を教えてはくれないか」

「はあ？ なんでアタイが汗くさい人間の道案内なんかしなきゃいけないのよ」

一刀両断。

すっぱりと切り捨てられた。

だが、それでは困る。

早く連絡を入れねば、明日のシフトに大きく影響してしまう。

「頼む。人里でなくてもいい。人が住んでいるところがあれば、そこに案内してくれ」

「だあかあらあ、なんでアタイが」

嫌な顔をして渋る少女を尻目に、堤は懷に右手を突っ込んだ。その仕草に少女は一瞬警戒の色を見せたが、懷から出てきた堤の手の中のものを見て警戒を解いた。

ところで、堤城平は無茶をすることが多い。仕事では1人で半トンを超える土嚢を人力で、しかも1度に運んだり。

体の怪我が治りきらぬ内に肉体労働に復帰したり。己の体を平時から限界以上に追い込んでいる男だ。ガス欠になって倒れかけた、あるいは倒れたことも少なからずある。

普段から、巾着袋の中に入れて持ち歩いているのだ。飴玉を、5つほど。

「これくらいしか礼はできんが、頼めないだろうか」

「そつ……そ、そこまで言うなら仕方ないわね！」

堤の右手の中にあつた飴玉を全て奪うと、手招きもせず歩きだした。

『ついていけばいいのか?』と聞くと、何かを口に含んでいるような声で『そうよ!』と返ってきた。

どうやら、この少女についていけば何とかなるようだ。そうやって安心した堤は、ようやく気がついた。

少女が、宙に浮いて移動しているということに。

「へえ。なんか変わった格好してると思ったら、外から来たんだ」

「まあ、そういうことになるな」

歩きだして、かれこれ1時間になるだろうか。

飴玉を完食したチルノが暇を持て余し、堤に話しかけてきた。

何より興味をもたれたのは、どうして森にいたのか。

彼は『走ってたらいつの間にかいた』と事実を説明したところ『あんたバカねえ』と鼻で笑われた。

チルノ曰く、というか、チルノが話していた情報を整理すると、こういうことになる。

- ・チルノは人間ではなく、妖精である。
- ・チルノは最強だが、たまに足元をすくわれて負ける。

- ・基本的に人間と妖怪は友好関係にない。
- ・今向かっている『コウマカン』は、吸血鬼が主である。
- ・『コウマカン』には人間のメイドがいて、非常に有能。
- ・『コウマカン』は妖怪だらけだが、基本的には人間に友好。

貴重であつたのは、今自分のいる土地には『妖怪』と呼ばれる生き物がいること。

そして、基本的には妖怪と人間は相成れないということだ。

堤が最初に考えていたのは『人間と妖怪が戦争をしている』ということだったが、辻褄が合わない。

それが日常化していれば、チルノは堤から逃げるか、逆に襲いかかるところである、

彼女の態度から一切の恐れが感じられないことから、その仮定は容易に否定された。

次に考えたのが『妖怪が人間を奴隷として扱っている』ということ。これであれば、今のところの情報からは否定される要素はない。

『コウマカン』にはメイドという奴隷と解釈しても差支えない人間がいる。

そして『コウマカン』の妖怪が人間に友好的というのも、人間を奴隷としても通用する。

他のグループよりも人間を丁寧に扱っていれば、それは友好的と言っても間違いではない。

何よりこの論を後押しするのが、チルノの態度に他ならない。

先ほどから堤を……人間を軽く見るような発言が多い。

もともと高飛車なのかもしれないが、それにしたって過剰だ。

『そこらへんの人間なら一捻り』なんていうあたりからも分かる。

よって、この時点で彼は警戒心を十分に持っていた。

いくら先導するのが可愛らしい少女だからと言って、油断はならない。

その少女が宙を浮いているのもそうだし、自分が『コウマカン』で厚遇されるとは限らないのだ。

それなりの覚悟を以って、堤は歩を進めていた。

ちなみに、彼はまだ『ゲンソウキョウ』という場所のことに關しては納得していない。

まず何より、日本国内ではあるうが、場所がどこであるかが全くわからないということ。

少なくとも岩手県内か、もしくはその周囲の県であると彼は推測している。

が、その推測も目の前の少女を見てしまうと、どうも揺らいでしまう。

彼女の話からするに、空を飛ぶくらいは珍しいことではないらしいという点。

その点に關しても、未だに納得はいかなかった。

いや、納得いかないのではなく、受け入れられないのだ。

あまりに現実……今までの現実から乖離した現象が起きている。

そのことに脳が追い付かず、現状の受け入れを拒否している。

もし『岩を砕く』などであれば、彼は驚かなかったろう。

彼が到達している領域からはまだ遠いが、できる人間が彼の近くにいたのだ。

そういった意味では、むしろ超能力じみた『飛行』をする少女の方が、彼にとって斬新である。

「おゝい、ツツミ！ 着いたよゝ！」

その声で我に返った堤城平。

彼がチルノのいる方を見ると、派手な色彩の建物が目に入った。

赤というよりは紅。

紅を基調としたというより、紅で外装のほとんどが占められていた。門の前に立っている女性の髪の色までもが紅という始末である。

その統一性の高さに目を奪われ『またねゝ！』というチルノの声も聞こえなかった。

そのとき彼は、深く考えていなかった。

『ここで電話を借りよう』とか、あとは『謝礼はどうしようか』と

か。

せいぜいがその程度のことであり、奇抜ではあるが建築物を発見したことで安心してしまった。

日は傾き始め、夕闇が迫る。

真実を知らぬ彼は『帰りはタクシーでも使つか』などと呑気に考えていた。

## 虎子ノ序章：長い寄り道

伊良子清玄。

彼奴を討てば、万事丸く収まる。

お家こそ守れなかったが、三重だけは守り抜く。

そのためには、藤木は伊良子を討ち果たさねばならなかった。

だが。

裏切られた。

裏切られたのだ。

三重は、伊良子と心中するために……。

死のう。

三重が命を絶った瞬間、彼は思った。

上覧試合がすべて片付いたら、自ら命を絶つ。

そう決心して、その場から去った。

それが、新たな始まりであった。

## 第6話『隻腕の虎』

むーざん、むーざん。

その童歌が、耳から離れない。

呪いのようにまとわりつき、耳の奥底に張り付く。

まるで、様々な亡霊が藤木の耳に取り付いているかのようなだった。

大局から考えれば、彼もまた、いくによって人生を狂わせた男であろう。

いくに関わったがために、己の左腕と存在意義を失ったのだから。

その格好は、下級武士のそれと同じであった。

礼装でも何でもない、ただの安袴。

ただ1つ違いがあるならば、彼の腰に差されている大小のみだ。

『虎殺し七丁念仏』は、もう手元がない。

伊良子を倒すときに『晦まし』を使って投げた際に、折られてしまったのだ。

いや、折られるとわかって投げたのだ。

今、藤木の腰に刺さっているのは、無銘の大小。

業物を揃える金もなかったため、適当なものを見つくるってきた結果だ。

どれほど歩いただろうか。

ふと周囲に視線をめぐらすと、そこは巨大な庭園だった。

彼が上覧試合をした場所よりもはるかに広く、そして、死の匂いに満ちている。

だが、その匂いが爽やかなのだ。

血生臭さや腐臭とは無縁の、春先の桜のような、あるやなしやの微かな匂い。

その匂いが、藤木の足を止めたのかもしれない。

右へ左へ視線を巡らし、己がどこにいるのかと確かめようとした。だが、左を見れど屋敷の縁側のようなものが、右を見れど遠くに塀があるだけだ。

「すみません、少々よろしいでしょうか？」

そこで初めて、藤木は前を見た。

見れば、そこには年端もいかぬような少女がいるではないか。背丈にして、彼より1尺近くは低いであろうか。

その少女が、身の丈に合わないような太刀を一本下げている。

もしや上覧試合の者か、とも考えた。

女性の参加者が1人いたはずだった。が、すぐに思い違いだと認識する。

その女性は、薙刀術の使い手であったからだ。

そしてなにより、藤木は城下から遠ざかっていったはずなのだから。

藤木の無言を、質問してもよいと解釈したようだ。  
やけに肌の色の白い少女は、刀に手もかけずに藤木に問うた。

「あの、この時期は桜は咲いていませんが……幽々子様に御用でしょうか？」

このときも、藤木は何も答えなかった。  
いや、正確に言えば何も答えることができなかった。

それは、目の前の少女から半端な生氣しか感じなかったからではない。  
い。

それは、目の前の少女が美しかったからでもない。  
それは、失われた己の左腕に微塵も気を取られない少女がいるからではない。

それは、単に思考が働いていなかったからではない。

感じたのだ。

己の師、岩本虎眼を。

兄弟子である、牛股権左衛門を。

字を教えてくれた、興津三十郎を。

虎子であった、宗像、山崎、丸子、涼ノ介を。

そう思った時には、駆け出していた。

どこへ、ではない。

いてもたってもいられず、駆け出したのだ。

「ちょ、待ってください!」

少女の制止もどこ吹く風。

藤木は、その庭園を縦横無尽に駆け回った。

己の不甲斐なさを笑う、宗像と丸子と山崎。

藤木を前に流した涙の意味を伝える、涼ノ介。

裏切りを悔いながらも、それも1つの正しさだったと言う、興津。

虎眼流の無念を果たしたことを心の底から喜んでくれている、牛股。

そして。

『ようやりとげてくれた』と、過去に一度だけ見せてくれた笑みを浮かべてくれる虎眼。

誰もおらず、そして誰もがいる。

そんな不思議な感覚が、藤木の中に生じる。

全ての想いに心中で言葉を返し、知らずの内に泣いていた。

藤木の様子から何かを感じ取った妖夢が、藤木を白玉楼に招いた。妖夢の権限で招くことを許されている客間までだったが、それで充分だった。

藤木の腰に刺さっている大小と、失われた左腕。

かなり前に白玉楼に来た、成仏できない剣士の集団の霊。

それだけで、彼らの間にどのような関係があるかには察しがついたが、細かい関係まではわからない。

差支えなければ、ということで、茶菓子と茶を出して腰を据えてもらった。

それは、聞くに奇怪な物語であつた。

ただたとしくも語られるそれは、魂魄妖夢をしても奇天烈な話であつた。

貧農の三男として生を受け、粗末に扱われた日々。

剣豪・岩本虎眼に拾われ、侍として新たな生を受けたこと。

虎子として己を磨いていった、仲間たちとの想い出。

怨敵、伊良子清玄との邂逅。

虎眼を裏切った伊良子への仕置き。

そして始まった、伊良子の復讐。

次々と命を借り取られる虎子たち。

ついに伊良子の剣に倒れる虎眼。

仇打ちに挑み、秘策破れて敗北する藤木。

己を捨ててまで立ち向かったが、願い叶わなかった牛股。

来るべき、再戦の日。

手に入れた勝利。

その勝利の喜びと同時に、大切なものを失った。

その全てが、並みの人間の人生を遥かに凌ぐ密度だった。

「そうだったんですか……」

藤木に言葉はない。

無言の肯定、というわけでもなく、ただただ茫然自失しているのだ。死したる者と再び会いまみえるなど、藤木の思想の中には存在しなかった。

それゆえに、今の現とも幻想ともつかぬ事態は、藤木の心中を混乱せしめていた。

「それで、どうやってここへ？」

「わかりませぬ」

妖夢の言葉に短く返す藤木の胸の内は如何なるものか。

表情こそ変わらぬものの、そこには様々な思いが見て取れた。

安堵、困惑、失望、覚悟、焦燥、驚愕。

一言では語りつくせぬそれらが混ざり合い、顔ではなく目に宿る。

感受性の高い妖夢だからこそ、彼の想いを読み取れたのかもしれない。

「……これから、どうするつもりですか？」

「既に死したる身なれば、腹を切りたく思いまする」

その考えに、納得できぬ妖夢ではない。

己が使命を全うできなかったのであれば、むしろ切腹は望むところである。

切腹と言う形で責任を取らせてもらえるのは、武士としては誉れなのだ。

そう、武士としては。

「藤木さん」

少しの間をおいて、決心したような様子で妖夢が声をかける。

藤木は相も変わらず無言で坐し、瞬きすらも惜しんでいるような具合だ。

いや、そんな藤木を見て、妖夢は決心したに違いない。  
そうして始まったのだ。

「よろしければ、少し寄り道しませんか？」

藤木の、長い長い寄り道が。

茶の間にいたのは、西行寺幽々子だった。  
いつも通り、ゆるい雰囲気を保ったままのんびりと茶菓子を口にしている。

そんな彼女の机を挟んだ向かいには、真逆の様子をした男と見慣れた庭師が1人ずつ。

どちらも背筋をピシッと伸ばして、キチツと正座をしていた。

「ゆゆ様。こちらが先ほどお伝えしました……」

「虎眼流、藤木源之助に御座います」

「西行寺 幽々子よ。……まあ、楽にきなさいな」

茶菓子を口に運びながら、朗らかな笑顔で幽々子は告げた。

その弛緩し切った様子を前にしても、藤木のピリピリした気配は変わらない。

なんというか、一步間違ったら斬りかかってきそうな雰囲気だ。

それくらい、必要以上に張りつめた空気を藤木は作りだしていた。

「それで妖夢。彼を召し使えたいというのはどういうことかしら？」

幽々子の目は、笑っていなかった。

柔和な雰囲気を持つてはいるが、笑ってはいない。

それはつまり、喜怒哀楽のいずれもが欠如しているということだ。

今この場において、幽々子にそれは存在しない。

ただ妖夢に必要なことを問い詰め、答えさせることのみに関心がある。

「恐れながら」

そういつて、妖夢は幽々子に頭を下げる。

今の『恐れながら』に含まれる意味が、全てその挙動に現れていた。

恐れながら、私の案をお聞きください。

恐れながら、私の身勝手な行動をお許してください。

恐れながら、無礼な振る舞いをさせていただきます。

その全てを、幽々子が感じ取れたかどうかはわからない。  
が、幽々子は何も言わない。

それは、彼女らの間において『進言を許す』という意味を持つ。  
それに従い、妖夢は面を上げ。

「私の体が持たないんですよ！」

その言葉と同時に、ダンと足を踏み鳴らして妖夢が立ちあがった。  
藤木が目丸くするほどの怒声とである。

それでも正面を睨んだままなのは、彼の性格ゆえか。  
ともかく、上から目線でものを言っていた幽々子が狼狽していた。

「あ、あの、その……妖夢？」

「妖夢？　じゃありません！　ココ最近桜もないのに宴会宴会宴会  
宴会！」

何人が手伝ってくれてるからまだしも、そろそろ私も限界なんです！」

目の端に涙を浮かべながら、小さな腕を大きく振り、己の怒りをあらわにする。

主従関係が甘い2人の間とはいえ、これは珍しいことだった。  
たまにこういうことはあるが、それが今であるとは幽々子にとって

も想定外である。

「だからってね、隻腕の武士を拾ってどうするつもり？」

幽々子は、ちよつとビクビクしながら聞く。

いつもはキツチリ主従関係を維持しようとする妖夢が、ここぞとばかりに声を荒げるのだ。

いつまで経っても慣れないのだが、今日はいつも以上の気迫があった。

「……幽々子様、それ、本気で言ってます？」

『隻腕』という言葉聞いて、妖夢の目がスツと細まる。

その目は、殺意や敵意とは無関係だ。

関係があるものは、叱責である。

では、妖夢が幽々子の何を責めているのか？

「冗談よ、冗談。ただ、白玉楼に男が居着くってというのは……」

今までの怯えが嘘のように、カラカラと笑い出す幽々子。

先ほどまでの彼女が演技であつたかのような笑いようだ。

その様子を見てか、この客間に来て初めて藤木の顔に疑問が浮かんだ。

そして、それを楽しむかのように幽々子はまた一笑する。

「ああ、藤木さん。置いてきばりにしてごめんなさいね。  
実は、貴方の師匠や仲間たちには、私の話相手をしてもらったことが  
あるのよ」

『あんまり珍しい話だから』と付け加えるも、源之助の耳には入って  
こない。

それは初耳だった。

というよりも、そんなことを確認している暇は藤木になかった。  
いや、死して霊と化した虎眼たちにもなかっただろう。

「それで、一応とっておいたものがあるのよ」

幽々子が何もない眼前の空間に手をかざす。

柔らかく、何かを撫ぜるかのような艶めかしい手つきだ。

彼女が手をかざしたところに、1つの幽霊が現れる。

それは、世にも珍しい、左腕の幽霊であった。

「貴方の左腕の幽霊よ」

左腕。

そう、彼の左腕だった。

どうして幽々子が藤木の左腕の幽霊を持っていたのか。  
それは、全くの偶然。

幽々子の仕事の1つに、霊の管理がある。

三途の川の死神ほどではないが、霊と話をすることもある。

その霊の1つ……牛股権左衛門の霊から、不思議な事を聞かれたのだ。

『ここに藤木という男が来ていないか』と。

聞けば、その名は弟子のものであるという。

魂を浴びせるかのような魔剣によって、左腕を斬り落とされたと。

その魔剣を放った男を殺し損ねたのが自分であるとも告げた。

幽々子が牛股からそんな話を聞いた、その2日後のことだ。

藤木の左腕が、白玉楼に迷い込んだのは。

「お断りいたします」

「駄目よ」

藤木の反目を僅かも許さず、幽々子はキツク言い放った。

その心中深くは察しかねるが、概ねの機微であれば妖夢にも理解できる。

藤木は、きつと両方とも断ったのだろう。

白玉楼で召し使えること、そして、己の左腕を取り戻すこと。

比重が大きいのは、左腕を取り戻すことに違いない。

己の過ちを真摯に受け止めてしまう、真面目すぎる彼の性からすれば至極当然と言える。

屈辱でさえも、彼は無かったことにできないのだ。

幽々子は、もう召し使える気なのである。

普段は万事どうでもよいかのように振舞っているが、頑としたときは譲らない。

彼女としても思うところはあろうで、藤木を手元に置いておきたいのだろう。

牛股達の話聞く限り、妖夢を凌駕する剣術の技前を持つとのこと。精神・肉体の両面での妖夢の修行のために、彼が必要だったに違いない。

「岩本虎眼から、正式に身柄を預かってるのだから。」

左腕を残しておいたのも、虎眼から頼まれたことなの」

だから、と幽々子は続ける。

否。

幽々子に続いた。

「貴方は虎の中の虎に御座います」

その涼之介に、山崎が続いた。

「主が生きておるうちは、虎眼流は生き続ける」

その山崎に、丸子が続いた。

「胸を張りなされ、若先生」

その丸子に、宗像が続いた。

「案外ココも、慣れれば楽しいもんだぞ」

その宗像に、興津が続いた。

「虎眼流ほど厳しくもないしな」

その興津に、牛股が続いた。

「虎眼流を死なせるには早いぞ、源之助」

その牛股に、虎眼が続いた。

「藤木源之助、西行寺幽々子に仕えよ。

岩本虎眼、藤木源之助への最後の命じゃ」

そうして、藤木の寄り道は始まったのだ。

既に人にあらず、剣鬼と化した藤木源之助の、長い長い寄り道が。

フォークリフトはいらないわね

「あら？　こんな時間に珍しい」

少し長くなった銀の前髪の手を指でいじりながら、彼女は館の外を眺めていた。

彼女の能力によって外観以上の広さを持つ『紅魔館』の廊下から。そろそろ主を起こす時間であるため、主の部屋に向かっていたので……。

白黒の魔法使いと紅白の巫女を除いては、極めて珍しい人間の客人であった。

汗で濡れた白い胸着を着ているが、妖怪ハンターの類ではないだろう。

件の客人の纏っている空気は、明らかに妖怪ハンターとは違う。

過去に1度『コガンリユウ』を名乗る武芸者が来たが、その武芸者に近い雰囲気を持っている。

彼は腕試しで来たらしいが、何故か小悪魔を倒した時点で迎えが来て帰ってしまった。

無表情で『これからにござる』という彼を、魂魄妖夢が宥めていたのは懐かしい記憶だ。

あのときは夜明けに差し迫っていたが、今は夕暮れを迎えて夜に至

ろうとしている。

この館の主たる吸血鬼も、駄々をこねながら目覚めるころだ。これは、ちょうどいいと言ってもいいのかもしれない。

何か運命が働いたのだろう。

彼女は手近な妖精メイドに『お客様に湯と衣服と香水を用意しておきなさい』と伝える。

無論、珍しい男性客であるということも、身長に比して頑強な体だということも。

そして『お客様を丁重にお迎えするように』と言つのも忘れなかった。

変わった人間だ。

紅美鈴が堤城平という人間に抱いた、最初の感想だった。

まず、服装が変わっている。

パチユリーの図書館で見せてもらった『大山倍達』が着ていた服と同じだ。

当人とは似ても似つかないが、その『空手着』という服装は寸分と違わない。

胸元に入っている『北辰館』という文字も、相違点と言えば相違点だった。

そして、風体が変わっている。

身長は彼女よりいくらか高い程度だが、その筋量が尋常ではない。

小さなフレームに無理やり巨大な粘土を張り付けたような体をしているのだ。

丸みを帯びているように見えるのも、その異様な筋肉のせいに違いない。

あとはまあ、ちょっとつぶらな瞳が不似合いだったが、そこには大して気にならなかった。

気配が妖怪であればリスの流れを汲む妖怪だと思うところだが、男からは人間の気配しかしてこない。

つまりところ単に顔つきの問題であるので、彼女は特に感想を抱かなかったのだ。

「すまないが、電話を貸してくれないか」

ジャブもフェイントもなく、ストレートからだった。

普通は軽い挨拶などしそうなものだが、いきなり要件からである。

彼としては『すまないが』の前置きがあるだけでも相当気を使っているつもりだ。

だが、それは常人から見ても無礼の部類に入るような振る舞いである。

考えても見て欲しい。

見ず知らずの人間が玄関先に来て、突然『電話を貸してくれないか』である。

不愉快とかそれ以前に、怪しんで警察に電話しかねないところだ。

が、そこは紅美鈴。

目の前の相手が人間で、しかも外界から来たようだと言うこともあり、特に気にした様子はない。

彼女が穏健派の妖怪であるという事実も、少なからず影響しているに違いない。

もし風見幽花などだったら、彼女の育てている植物の肥やしになっているところだ。

「黒電話ならありますけど……館内に2ヶ所しかないし、中でしか使えないですよ?」

その2ヶ所というのも、主の部屋とメイド長の部屋だ。

それは『主が心細くなったときにメイド長に傍にいてもらうためにのみ使用される。』

用件はまちまちで『急にノドが渴いた』『布団が湿っぽい』などがある。

過去に何度か『寂しくて1人で寝れないから』という旨の電話があったとかなかったとか。

とにかく、美鈴には何のために電話を借りたいかが理解できなかった。

「そうか」

そういうと、男はその場に……門番の彼女の前で仁王立ちを始めた。美鈴の割と正確な体内時計が1分、2分と時間が過ぎていくのを伝える。

5分を過ぎてもピクリとも動かず、10分を過ぎたころには再び話しかけていた。

「あの、ご用件を掻い摘んで説明して頂けますか？」

「すまんが、自分の現状を把握しかねているくらいだ。説明は難しい」

「……そうですか」

すぐにあきらめた。

そこから更に20分経過したところで、わりと新入りの妖精メイドが美鈴のところまで来た。

冗談抜きで息が詰まりそうであったため、彼女は心底ほっとしていた。

しかし、妖精メイドからの伝言を聞いて、『ほっ』が『はあ』に変わりそうになった。

それが、紅美鈴と堤城平の最初の出会いであった。

……ここで『メイド服』が出てこないのは、堤の頭が古いからかもしれない。

というわけで、汗臭い空手着を脱ぎ、体にこびり付いていた汗の残滓を落とした。

シャンプーを控えめに使って頭を洗い、やたら香りのいい石鹸で体を洗う。

大衆浴場のような風呂であるため湯船もあったが、申し訳なさもあり浸からなかった。

本当は体が冷え切っているため温めた方がいいのだが、堤はそれよりも気遣いを優先した。

そして風呂からあがると、そこにはもう服が用意してあった。

脱衣所の出入り口の扉が鳴ったような気がしたが、気にしないことにした。

服装は、彼の着慣れないパジャマだった。

いや、パジャマなのだが、家の中なら歩き回っても許されるデザインだ。

レースの生地が少しばかりゴワゴワして不快だったが、汗臭い空手着よりはマシかもしれない。

青を基調とした単色のパジャマで、上下ともに少しばかり薄手である。

サイズがなかったのか、今さっき裾上げされたような跡が見受けられた。

突然の規格外の体をした客に合わせたことだろう。

脱衣所から出ると、先ほどの少女たちと同じような恰好をした少女がいた。

門番くらい高い身長と銀色の髪が特徴的だ。

彼女こそ、メイド長である十六夜咲夜である。

人間としても割と際立つ美貌をしている彼女だが、堤の琴線には今のところ触れない。

少し見つめられているので『やだ、もしかして気になってる？』などと思ったのも束の間。

2分も3分も立ち尽くしている堤を見て、勘違いをしていたということに気づかされる。

自分の思い上がりに呆れた咲夜は、1つ咳払いして会話の間を取りなおした。

「失礼します、堤様。お疲れのところ申し訳ありませんが、お嬢様の部屋まで来ていただきます」

そこは疑問符すら含まれていなかった。

ただ淡々と伝えるべきことを伝える。

そういう表現が似つかわしい動作だ。

まっとうな客人として扱ってはいない、ということだろう。

堤もそれは心得ていた。

彼自身がまっとうな客人でないことも、失礼に失礼を重ねていることも。

多少なりとも館の主と眼前の女性の怒りを買っているのではないかということも。

だから、彼は文句1つ言わなかった。

「わかった」

「では、こちらへ」

それにしても、本当にリスみたいな目をしている。

咲夜は心底そう思った。

愛嬌のある瞳ではあるが、その他の外見と見事にミスマッチしている。

そんな彼女の感想と全く同じ話題が妖精メイドの間で広まっていたのだが。

まあ、それはまた別の話と言つことで。

「それと、ツツミ様。お嬢様とお会いになる前に1つ注意を」

「なんだ」

突然足を止めて振り返る咲夜。

その目は真摯に堤を見つめており、彼女の真剣さが伝わってくる。これはただならぬ用件に違いないと身構えた堤に、彼女は調子を抑えた声で告げた。

「私が……」

「ようこそ、紅魔館へ」

仰々しく足を組んで、絡めた己の指を胸元で弄んでいる。

その目は外見と不相応な艶めかしさを宿し、その趣味のものなら飛びついて行きそうだ。

だが、幸か不幸か堤城平は幼女どころか女性に興味を大して持っていない。

その人生の大半を空手に捧げてきたのだから、当然といえば当然だ

ろっ。

正直なところ、目の前の少女が背伸びしたポーズをとる理由が理解できていなかった。

ちなみに、これは彼女が5年の時間を要して築き上げたポーズである。

曰く『カリスマが滲み出てくるような』とのことだが、分相応とは言い難い。

普通に挨拶した方が決まっているのだが、誰もそのことを指摘してくれなかったのだろう。

自信満々、余裕たっぷりレミリア・スカーレットは構えていた。

沈黙。

沈黙。

耐えがたい沈黙が、1分と少し続いた。

「……で、ツツミ。貴方はこの吸血鬼の館にどのような用があるのかしら？」

口元の笑みを崩さずに、足を組みかえつつ堤に問うた。

『どうして反応がないの！？』という気持ちは、どうにか心の奥にしまいこんだ。

もちろん、咲夜が彼女の背後で必死に笑いを噛み殺しているのには微塵も気づかない。

「外部との連絡手段が欲しい。勤め先に連絡を入れたいのでな」

対する堤の返事も、極めて簡潔なものだった。

要は通信機の類を貸してほしいということである。

「あなたはどうか、幻想郷がどういふところか理解できていないよね」

「その通りだ」

堤の愚直さが、レミリアには痛かった。

自分のペースに持ち込もうにも、皮肉さえも受け流してしまう。

せっかく疑問を呈したり食って掛ってきたところを嗜める計画が台無しだ。

動揺を心の奥に仕舞いながら、レミリアは言葉を続けた。

「幻想郷というのは、一種の異世界。

二重の結界によって常世から隔離された、貴方の知っている世界

と似て非なる世界。

人間と同じように妖怪が闊歩し、妖怪が人間を襲う、アヤカシ達にとつての聖地でもある。

そんな世界に、貴方は来てしまったのよ…… ツツミ・ジヨウヘイ。そして貴方は、その幻想郷でも指折りの力を持つ吸血鬼の前にいるの」

怪しげな笑みを浮かべて見せるが、堤はやはりピクリともしなかった。

表情にも変化がなければ、何かアクションを見せるわけでもない。ただそこで、レミリアが言っていることを聞いているだけだった。

「あの……ピッキリしたりしないの？ 『吸血鬼だ〜！』とか」

「チルノが浮いているのを見たからな。もう大抵のことでは驚かん」

チルノの飛行ごときと自分の正体をならべられたことにも腹は立つが。

それ以上に、堤の落ち着きように腹が立つ。

吸血鬼が、永遠に紅い幼な月たるレミリア・スカーレットが目の前にいるのに。

驚きも慌てもせず、当然のように会話しているのだ。

「いいこと、堤。吸血鬼とは、幻想郷でも指折りの実を持つ種よ。

普段は人間の生き血を啜って糧として、月が照らす永遠の夜を生きる……」

「それはつまり、俺を餌にしようということか？」

「え？ いや……そうじゃないけど」

「ならいい」

面目丸潰れである。

レミリアは、ここまで堤の肝が据わっているとは思わなかった。同種である人間が餌になっているという事実には驚きもせず、冷静に対処しているのだ。

不思議と言うよりも、吸血鬼の彼女をして不気味な存在だった。

間。

間。

間。

刻一刻と時間が過ぎていき、入れたての紅茶が冷え切ろうとしていた。

レミリアの心は焦燥一色で占められ、もはやまともな思考能力も残っていない。

とりあえず脳味噌の片隅に『カリスマ』という単語が踊っているだけだ。

500年生きた脳味噌は上手く回らないのに、目ばかりはここぞとばかりに回り出す。

……ここ数年、威厳がなくなってきたという噂が立ったのがいけないのだろう。

「堤様、いかがなさいましたか？」

と、咲夜が助け船を出す。

そこですかさず、レミリアは尊大な態度を取った。

「咲夜。彼は今、この私と話しているのよ。出過ぎたマネはよしなさい」

内心では『ナイスフォロー！』とか思ってるクセに、よくもまあそんな言葉が口をつく。

まあ、彼女の内心に関しては館に勤めている者なら概ね把握できるところである。

「すまん」

「あら？ 何故貴方が謝るのかしら？」

「今までに感じたことのないカリスマを前にして、言葉がうまく出てこなかった」

今間違いなく、嬉しそうな顔で『え？』って言った。

堤にもそれくらいのはわかり、ということは咲夜も知るところである。

そんな顔をしていたのを知らないのは、残念なことに彼女自身であった。

未だににやける口元にも気がつかず、カリスマなどどこへやら。外見相応の得意げな調子で、堤に対して口を開いた。

「そう、ならしかたないわ」

その声の、嬉しそうなこと。

あまりに嬉しそうな顔をするので、彼は少しばかりの罪悪感に苛まれた。

そもそも先の発言、堤にしてはおかしいのだ。

彼は少なくとも2人、レミリアをはるかに上回るカリスマの持ち主を知っている。

1人は北辰館の館長・松尾象山、もう1人は東洋プロレスの社長・グレート巽。

この2人の方が、彼にとっては圧倒的に強いカリスマを持っていた。

これを仕組んだのは咲夜だ。

彼女はレミリアの前に堤を連れてくる際に、こう言ったのだ。

「私が貴方に話しかけたら、『カリスマが強すぎて言葉が見つからなかった』と言ってください」

と。

多少咲夜の指定とは違った言葉だったが、逆にそれが効果的だった。堤城平の言葉で言ったからこそ、レミリアは信じたのだ。

「さっきも説明したけど、もう帰れないわ。もちろん、連絡も取れない」

その事実を突き付けられた、彼の心境はいかほどのものか。

少し俯いたまま、堤は黙りこくってしまう。

ただでさえ状況が整理できていなかったのに、更にその上どうにもならないと言われたのだ。

仮にそれが冗談であったとしても、彼の心へのダメージは計り知れないだろう。

丸々10分経過したところで、ようやく堤が一言だけ発した。

「……そうか」

人間らしさが宿った堤の声を、彼女たちは初めて聞いた。

その声の中にあるのは、未練という感情だった。

彼は、外の世界に多くはないものを残してきた。

己の家族、己の友人、己の会社、己の財産。

そして、己の生きる目的でもある『戦い』を残してきてしまった。

その未練がましさ、堤の声に宿った感情である。

「そう、そういう『運命』だったのよ」

運命、という言葉を少しでも強調するレミリア。

多少の憐れみは含まれていたが、そこに一切の容赦はなかった。

遅かれ早かれ伝えねばならない事実なのだ。

少なくとも、原因はどうあれ堤が外の世界に帰れないということは。

1時間ほど経ったであろうか。  
咲夜が2度紅茶を入れ直した時のことだ。

レミリアは暗い雰囲気但至少でも和らげるべく、本題に入った。  
もともと、カリスマの誇示やら何やらはオマケみたいなものだったのだ。

本当の要件は、ようやく彼女の口から語られた。

「そうね。良かったら、しばらくここで働かないかしら」

堤は答えない。

彼にしては珍しく、打ちひしがれているのだ。

外の世界から来た人間は生きている限り帰れるということを知ったら、彼は余計落胆するだろう。

何せ、彼は、どうあがいても帰ることができないのだから。

そのような運命に巻き込まれて、普通ではなくなってしまったのだ。  
うつむいたまま拳を固く握ると、そのまま押し黙ってしまう。

「メイドは十分にいるんだけどね、男手の欲しい仕事も多いのよ」

そんな堤の様子を無視して、先ほどまでと違った様子で語りかけるレミリア。

今の彼女の口調は気の置けない使用人に対するそれと同じだが、堤はそれを知る由もない。

辛うじて会話の内容は耳に入っていたが、混乱とショックで頭が働いていなかった。

口が開かれることなどはもちろんなく、ほんの少しの静寂が部屋を支配した。

「俺が人並みにできるのは、荷物を運ぶことと空手くらいだ。あとは簡単な料理と補修ならできる」

口をついたのは、頭の中と関係のないことだった。

会話が成立しているのは、今の彼が質問に対して答えているだけだからだ。

もし彼に複雑な思考を行わせようとしても、今は無駄だろう。

「荷物と言いましたが、重たいものでも運べるのですか？」

レミリアが雇うにしても、使うのは咲夜だ。

その彼女としては、堤がどれくらいの能力を有しているか知りたいところだ。

もっとも、それほど過剰な期待はしていない。

筋骨隆々としてはいるが、成人男性並みの仕事ができればいいと思っていた。

空手に關しては、幻想郷では人里以外でたいした意味はないので度外視している。

しかし、彼女たちはすぐに堤城平に対する認識を改めることとなった。

「400kgくらいまでなら、肩に担いだまま移動できる」

2人とも、固まっていた。

何の能力ももたない人間が、400kgも運べるというのだ。サイズに限りはあるだろうが、逆に言えばサイズさえ間に合っていれば運べると言っている。

それが事実であるならば、堤はかなり重宝する。

紅魔館の庭の肥料の運搬に、大図書館の厄介な本の整理もまとめて頼める。

大規模な補修の際には即戦力になるし、家具の移動も彼1人にやらせれば済む。

雑務になってしまうが、雑務のエキスパートという意味では貴重な人材だった。

「フォークリフトはいらないわね」

こうして夜が明ける前に、堤城平の新たな日常が幕を開けた。  
紅魔館に住む唯一の男としての、新たな日常が。

しかし、その日常が彼にとって心地よくなるのは、もう少し先のことである。

ありがとう

僕が外来の客を迎えると言うのは、かなり珍しいことだろう。

人間とも妖怪とも商いはしているが、これは本当に珍しいことだ。

外来の人間が香霖堂に、しかも服を求めてきたというのだ。

先ほど来たメイドの伝言に間違いがなければ、の話だが。

「なあ香霖。この上下が一緒になった服はなんだ？」

魔理沙が、これから来る客のための服の1つを両手で広げるようにして持っている。

そのサイズは彼女には少し大きすぎるため、服の裾が少し地面に垂れてしまっていた。

機能性と言うことならともかく、意匠の面からみればこの服を選ぶことはまずないだろう。

だから、僕は魔理沙に注意することもなく、それが何であるかを教えた。

「それは『つなぎ』と言ってだね、作業着の一種らしい」

その奇妙な構成からマジックアイテムの一種かとも疑ったが……買

いかぶり過ぎだった。

分かったのは『つなぎ』という名前と『作業の際に身につける』ということ。

能力まで使ったのに、ただの作業着だったというには少し落胆した。

しかし、今日来る外界からの客人には興味がある。

もしかしたら、ここにある道具の使い方もいくつか分かるかもしれない。

以前来た武芸者は、刀の目利きしかできなかったからな。

この『フォークリフト』や『インパクトドライバー』の使い方なんかは知っていてくれると助かる。

守矢の巫女に聞いても、これらは専門的な道具だそうで使用法はわからなかった。

さて、明日来るというツツミ君はどうだろうか？

僕が知らない道具の使用法を知っているだろうか？

そんな期待に胸を膨らませながら、僕は少しでも早く寝ることにした。

十六夜咲夜。

彼女の夜は遅くまで続き、朝は早くにやってくる。

妖精メイドたちが仕事に来る前に、いろいろと準備せねばならない。特別な仕事はないか、トラブルは起きていないか。

自分にしかできない仕事は終わっているか、何か予定は入っていないか。

そういったことを、誰よりも早く起きて確認する。

そして、今日。

彼女がすべき仕事の1つとして、新たに紅魔館に仕えることとなった人物の下準備がある。

堤城平だが、今のところ服らしい服がない。

紅魔館に来た時に来ていた空手着と、客人用のパジャマと礼装だけだ。

要するに、普段着と言うものが一切存在しないのだ。

そういうわけで、ここ5日は礼装で過ごして貰っている。

しかし、彼は客人ではなく労働者として紅魔館に来ているのだ。

これから働いてもらうというのに、そんなことでは大いに困る。

だから、彼女は2日前に香霖堂に服を用意しておくように連絡しに行っていた。

男性用の普段着を、サイズ・デザイン問わず多目に出しておいてくれ、と。

でもって、今は堤を起こしに来たところだ。

初日は精神的に疲弊してそうだったが、最近は少しずつ生氣を取り戻していた。

彼女としては未だに不憫に思う部分もあり、ゆっくり寝かせておきたい気持ちもある。

だが、もう堤城平は紅魔館の預かりであるのだ。

厳しいが、いつまでも彼だけ特別扱いするというわけにもいかなかった。

……紅魔館に来てから一週間後に勤務開始という約束なので、正確には2日後までは客人だが。

「ツツミ、もう起きているかしら」

彼女の失敗は、ノックしてすぐさま扉を開けたことだろう。

そこには、レースのパジャマからパーティー用のスーツに着替えている堤がいた。

しかも、ピンポイントで下着一丁の姿を惜しげもなく披露している。そんな堤の姿は、年頃の娘には少々毒であった。

が、そこはメイド長たる十六夜咲夜。

引き返しそうになった足をなんとか踏みとどめて、堤に声をかけた。

「どうした」

せめて、羞恥心くらいは持つべきだと思う。

いつものように仁王立ちしている堤は、眉一つ動かさずに応答した。そんな彼にまだ慣れないのか、内心頭を痛めながら、平静を装って咲夜は返す。

「朝食を食べながらになるけど、今から服を調達しに行くわよ」

「人里まで行くのか？」

「いえ。外界の服も扱っている店があるから、そこに行くの」

その店は『香霖堂』と言って、外界から流れてきたものを扱う店だ。そう簡単に説明して、堤は納得してくれたらしい。

「そうか」

と呟くと、また仁王立ちを始めた。

そんな堤を見て、咲夜は改めて堤に感心した。

鍛え上げられた体は、ただの人間とは思えないほどの密度と質量が感じられる。

だが、決して固いだけではなく、不思議な柔らかさを秘めているように思う。

柔軟性と強靭さを兼ね備えた、そんな肉体だと素人目にも分かる。そんな肉体にも感心して、色々と大切なことを忘れていた。

「悪いが、着替えを続けたいから扉を閉めてくれ」

「……あら、ごめんなさい」

まさか、堤にダメ出しされるとは。

すっかりしなきゃ、と咲夜は自分に言い聞かせる。

まだまだ一日は始まったばかりなのだ。

これくらいで疲れていては、あっという間に寝込んでしまうだろう。

扉を閉めながら気合を入れ直し、彼女は厨房へと向かった。

サンドイッチを食べながらの道中は、さながらピクニックのようであつた。

瀟洒な少女と屈強な男性の取り合わせはいかにも奇妙だったが、これはこれで微笑ましい。

……などというのではなく、サーカスでもなければ怪訝な視線で見してしまうだろう。

いくら堤がタキシードを着ているとはいえ、妙な取り合わせと云うことに違いはなかった。

文字通り、美女と野獣……メイドと餓狼である。

彼女はサンドイッチを5人分も作ってみたのだが、どうやら正解だった。

咲夜が少し多めに1人半分。

堤が食欲を満たすべく3人半分。

これで丁度5人分だった。

確かに咲夜は『遠慮しないで食べなさいね』とは言ったが、堤はホントに遠慮しなかった。

彼女も学習したが、堤は言葉を真っ直ぐに受け取るらしい。

『遠慮するな』と言えば遠慮しないし、『館から出るな』といったら本当に一步も出なかった。

ここ数日の彼の行動は、睡眠と食事、排泄と入浴、それと館内の探索だけだ。

もちろん、地下牢を含めて、許可されていない場所には行っていない。

で、籐のカゴにサンドイッチを入れてきたのだが、邪魔になるからとメイド服のポケットにしまった。

その光景を見た堤が『それは何だ？』などというものだから、彼女は少し思案した。

そして、彼女の能力を知るものも知らぬものも納得できるように『タネなしの手品よ』と答える。

堤も堤で『そうか』と答えるなり、それ以上のことは聞かなかった。

そんなやりとりがあつてから、30分ほど歩いた時のことだ。流石に手持無沙汰になったのか、咲夜から声をかけてみた。無難な話題がいいだろうと、少しばかりの気も使つて。

「ところで、昨日はよく眠れたかしら」

「初日に比べれば眠れている」

確かに、初日に比べれば顔色は大分よかった。

初日の朝など、一睡もできずに夜を過ごしてしまったようで、少し朦朧としていた。

また、2日目も眠れなかったらしく、少し足取りが怪しくなっていた。

その日の夜に、こつそり睡眠薬を食事に混ぜておいたおかげか、3日目は眠りっぱなしだった。

で、彼はまだ紅魔館に来てから4日目だと思ひ込んでいる。

レミリア、咲夜、美鈴、パチュリー、小悪魔の5人で話し合ったが、訂正しないことにした。

今の堤に必要なのは休息である。

何だかんだ言つて、偶然とはいえ紅魔館に案内されなければ帰れたのだ。

堤が帰れなくなったのはレミリアの影響が極端に大きいため、それを悔いての判断でもある。

無論、堤に万全な状態で働いてもらわないと困るということもある。

必要以上に、彼女たちの甘さが出てしまっただけの話だ。

「そう、ならよかったわ」

「助かっている」

短い言葉だが、それが不器用な堤なりの感謝である。  
そんなことはもう、咲夜にもわかるようになっていた。

しかし、香霖堂までは結構な距離がある。

いくら咲夜が有能だと言っても、途中で山道を抜けなければならな  
いため少々厳しい。

本当は飛んでいきたいところだが、堤が飛べない。

堤を引っ提げて飛行する姿を想像すると、咲夜もそれをためらって  
しまった。

というか、堤を抱えて飛んでいる自分が想像できなかった。

「もう少し歩けば、店に着くから」

「わかった」

半分は、自分に言い聞かせたようだ。

堤の短い返事に慣れてきた彼女は、一言も返さずに歩き続けた。  
距離の取り方が分からない今は、こうするしかないのだ。

まあ、距離を取るという選択ができるようになっただけイイか、と彼女は考える。

香霖堂まであと10分。

早く堤に慣れようと思いながら、彼女は無言でその道を行った。

---

「ああ、いらっしやい。彼が、外界から来たという……」

「ツツミ・ジヨウヘイだ」

咲夜よりも早く名乗りを上げた。

こついうところは律義な男である。

「ツツミくん、僕がこの『香霖堂』の店主、森近霖ノ助だ。好きに呼んでくれて構わないよ」

『親しい者は香霖なんて呼ぶがね』と付け加えた、メガネをかけた優男。

一見すれば、柔和ともとれるような外見と雰囲気を纏っている。この男こそが、今名乗りを上げた『香霖堂』店主、森近霖ノ助である。

妖怪にも人間にも属さない、というより、その両者のハーフだ。

その特殊性ゆえに両者に平等でいられるのか、それとも彼の生来の性格なのか。

それは分からないが、彼は客の素性にこだわらないというのは間違いない。

例え外界から来た人間であつたも、客であるならば彼にとって単なる客である。

「ツツミくんだが、確かに少々特殊なものが必要だな」

「そうね。身長に比べて体が大きいから、サイズを合わせないと服がなさそうなのよ」

「そういうことなら、安心してくれ。この間、大量に服が手に入ったから」

香霖が店の奥から引つ張ってきた2つのラックには、たくさんの服が掛けられていた。

ジーンズ、Ｔシャツ、カッターシャツにポロシャツ。

綿パンもあれば革ジャンもあり、正装からカジュアルな服まで何でも揃っていた。

2つの大型のラックにこれでもかと掛けられた服は、店の窮屈感を否応なしに増した。

これほどの品揃えを期待していなかったのか、堤だけでなく咲夜までも目を丸くしている。

「すごいわね」

「言っただろ。大量に服が手に入ってたって」

確かに大量であった。

堤に合うサイズの服がいくつあるかは別として。

いや、裾上げすればどうにかなるのではないか。

幻想郷の民からすれば大き過ぎる服ばかりが揃っている。

大体180cmから190cmくらいの人間が着る服ばかりだ。だからこそ、裾上げだけで堤でも着用できるようになるのだが。

「今回は君らが持っていける分はタダで構わないよ」

「いいのか？」

「もちろん」

疑問を呈したのは、咲夜ではなく堤だった。

彼は、幻想郷に来てからまだ一週間も経っていないような状態だ。金も持っていないし、その代わりになるものも一切ない。あるとすれば労働力くらいなもので、それもどの程度通用するかわからない。だからこそ、どうして香霖がこのような態度を取るのか理解できなかった。

「その代わり、少々手伝ってもらいたいことがあってね」

少しもつたいつけたような言い方をするのは、癖なのだろうか。そう言うなり倉庫の中に入っていく。

そして、1分も待たずに出てくると、形の崩れた拳銃のような道具を握っていた。

その道具が『インパクトドライバー』であると堤の知識が告げる。

「少し、僕の実力の説明をしよう。

僕の実力は『道具の名前と用途が分かる程度の能力』でね。

そのおかげで、こうやって珍品堂を開いてもそこそこ客が来るんだ。

まあ、残念なことに、これでは『道具の使用方法』がわからないんだけどね」

そういうと、香霖は『こつちに』と堤と咲夜を促した。

半年前に立てた倉庫の中である。

その倉庫の中に流れ着いた品を貯めておくのだろつ。

現に、その倉庫には堤にとって見慣れた重機があった。

「そこで、君に協力して欲しい。君の知っているものだけで構わない。

ここにある道具で使い方を知っているものがあれば、ぜひ教えて欲しい」

堤は困った。

何にかと言えば、道具の説明である。

インパクトドライバーに、フォークリフト。

重さの調節できるダンベルに、トレーニング用のゴムチューブ。

さらに、トランシーバーまでもが放置されていた。

「これは『フォークリフト』といって、人力で運べない荷物を運ぶ道具らしいんだが……」

使い方が分からない、ということだろう。

普通免許持つてくるくらいじゃ操縦もままならない機械である。

幻想郷の民がそれをどうしようとする事など、不可能に近いことだ。

が堤にとっては、パツと見ただけで使い方分かる道具だらけなのである。

これらをすべて説明しようとなると、今日中に終わるかどうかが微妙

なところだ。

簡単な道具がほとんどだが、フォークリフトこそが曲者。

もし動くのであれば、一から説明せねばならない。

特殊な資格の必要なそれを、いかにして素人に説明するのか。

基本的に口数の多くない彼からすれば、それは難題に違いない。

「これなら、電源さえ手に入れば操縦できるが」

当たり前のことだ。

いくらフォークリフト並みのパワーを持っているとはいえ、運輸会社勤務である。

フォークリフトの1つも使えないはずがなかった。

「そうか……それじゃあ仕方ない。そちらのフォークリフト以外を頼む」

こちらの住民が使えない道具に興味はない。

そういうことだった。

件のインパクトドライバーについても同様だ。

車のバッテリーがあるものの電圧を変えられない堤には、使えないとした伝えられなかった。

もちろん香霖はがっかりしたが、半ば諦めていたとのことですぐに気を持ちなおした。

が、それはそれとして結構盛り上がったようだ。

「このダンベルとやらはどう使うんだい？」

「この留め具を外して重りを付け外して重さを調節する。

あとは、こういう風に持ち上げたりすることで、鍛えたい部分に刺激を与える」

「なるほど……思っていたより原始的な道具だったわけか」

「原始的だが、身の丈に合った重量にしないと怪我をしやすい」

などと、思ったより会話が続けている。

咲夜はというと、茶器でも見ておこうかと棚に目をやっていた。

古くはあるが汚れてはいない棚の中には、西洋風のティーセットが4つ。

そして、中国茶を味わうときの茶器のセットが1つ置いてあった。

どちらも紅魔館に常備してあるものであり、これ以上置いておく必要もない。

予備も十分にあるため、すぐに興味を失ってしまう。

さて、では刃物でも見ていこう。

そう考えた彼女は、茶器とは反対側の武具の類が置いてある方へと

歩を進める。

古今東西雑多な武器があるが、彼女はナイフしか使わない。

それも、大きくても30cmを超えない程度のナイフだ。

投げて良し、切つて良しの獲物でないと、彼女の能力も生かせない。一応回収はしているが、刀身が折れたりして使えなくなる場合もある。

20本くらい追加しておこうか、そう考えた時だ。

堤にも武器がいるのではないか？

不思議と、その考えによく辿り着いた。

『カラテ』という格闘技に加え、同じく『サンボ』『ボクシング』という格闘技も経験がある。

それがどんなものかは美鈴の知識とパチュリーの図書館で分かった。全て等しく素手なのだ。

ボクシングに関してはグローブをはめて行うのが常識らしいが、それは武器ではない。

拳を保護するための道具であると、専門書には記されていた。

彼女が察するに、堤は人間としては相当強い。

恐らく、里の人間の誰と比べても遜色ない実力を持っているだろう。だが、弾幕ごっこなど望むべくもなく、妖怪よりは弱いに違いない。ルール次第では戦えないこともないが……正直なところ、戦力には数えられない。

彼の『素手』という戦い方を生かせる武器を調達する必要がある。今更ながら、そう思い至った。

刀剣類のコーナーから少し左に目をやると、刀剣以外の武器のコーナーが目に映る。

鎧を貫くために作られたツルハシのような武器や、一目でそれと分かる騎兵用のランス。

新機構を備えたボウガンもあれば、振ると飛び出す特殊警棒まで置いてある。

より取り見取りではあるが、これはどれも堤の性分に合わないと咲夜は直感する。

ナツクルなども目に入ったが、これも論外だ。

堤は相手の体を掴んで行う技も使用する。

このような手の動きを極端に制限する武器は、かえって堤の力を削ぐことになる。

発想は良かった。

素手の戦いに近い武器。

しかし、これではダメなのだ。

もつと自由度の高い道具。

などと考えたが、ふと馬鹿馬鹿しくなった。

堤を戦闘要員ではなく、雑務担当として雇うのだ。

本人が希望するならともかく、こちらから武器を揃える必要もない。よくよく考え直し、道具の説明の進行状況を確かめようとした時だった。

彼女の視界の端に、それが入り込んできた。  
まるでそれも、運命であるかのように。

香霖の「また頼むよー！」という声を背に受けながら、2人は帰路についていた。

咲夜が時計を見ると、まだ10時40分くらいである。

行きと同じペースでいけば、昼食の準備には十分間に合う時間だ。  
とはいっても、館の雑務が終わっていないはず。

紅魔館に帰ってから、咲夜は忙しくなりそうだ。

ちなみに、服は全部持ち帰ることとなった。

咲夜が空間操作を行い、風呂敷で包んだ後にバスケットの中に仕舞いこんだのだ。

香霖が気にした様子はなかったが、堤が少し申し訳なさそうにしていた。

また機会があれば、他の道具の使い方を説明しに行くという件は、堤からの提案である。

ところで、咲夜が持ち帰ったのは服だけではなかった。

香霖からティーセットを1つと、堤のための武器を1つ。

当初の予定にはなかったが、これらを購入していった。

堤はダンベルを名残惜しそうに見ていたが、それはいずれ自身の給料で買ってもらうことにしている。

というか、地下に小さいながらもトレーニングルームがあるので、正直必要ない。

行きも行きなら帰りも帰り。

道程を半分まで踏破したが、堤も咲夜も無言だった。

間が持たない、ということはない。

咲夜は沈黙には強いタイプだし、堤も余計なことは口にしない。その性分ゆえの静寂であった。

「ありがとう」

「え？」

「ありがとう、と言ったんだ。今日は、本当に勉強になったし、服の件も助かった」

だからだ、と言わんばかりに前を向いたまま堤は言い放った。  
あまりに突然のことで、咲夜の思考が一瞬固まる。

だが、すぐに思い直した。

堤城平は不器用なのだ。

不器用で、そのくせ真っ直ぐなのだ。

前を向いたままなのは照れ隠しで、突然前置きもなしに言ったのも言葉を探してたから。

そんなことに気付ける自分を少し褒めたあと、彼女も何か言うことにした。

何がいいだろうか？

そんなことは考えない。

決まっているのだ、何を言うべきか。

紅魔館の誰もが、もしかしたら彼に言わねばならない言葉。時間が経ってしまつては、意味がなくなる言葉。

「咲夜でいいわよ」

その言葉を耳にした堤が、帰り道で初めて咲夜の方を見た。

いつも丸いリスのような目だが、そこには確かに感情がある。

驚き……純粋な驚きだけが、そこに詰まっていた。

「ファーストネームで呼びなさい。これから貴方は、私の仲間なんだから」

満面の笑みとはいかないが、笑顔を浮かべて伝えた。

「ありがとう、咲夜」

堤の言葉は短い。

堤の言葉はシンプルだ。

だからこそ、その言葉は一切ブレることなく。

咲夜の心中に確かに届いた。

やっぱり真っ直ぐな男だ。

咲夜は笑みを崩さぬまま、彼を真っ直ぐ見据えた。

お互いに笑みを浮かべて顔を見合わせ。

そして、どちらともなく帰路へと足を伸ばした。

午後からも咲夜は仕事に忙しかったが。

とにかく、彼女にとって今日はそんな1日だった。



## リアル

紅魔館に来て、7日目。

つまり、堤城平にとっては6日目の朝。

咲夜、美鈴、パチュリー、小悪魔、堤の5人で食事をしている。

今日に至るまでに全員と出会って自己紹介も済ませたが、全員での食事は初めてのことだ。

今日の朝食は和風である。

鮭の塩焼きに大根おろしを添えたもの。

ほうれん草のおひたしに鰹節をまぶしたもの。

豆腐とわかめの味噌汁は、塩分控えめの薄味になっている。

きんぴらごぼうには、貧血対策に鳥のレバーを蒸したものを砕いて混ぜて。

マグロの山かけは、いちいち噛みちぎらなくてもよい絶妙なサイズにカットされている。

そして、メイド長が朝一で炊いた米は、ほのかな日の光を受けずとも輝いているように見えた。

その量、実に15人分。

ここでの1人分は、人間である魔理沙基準の1人分である。

咲夜は少々多めに食事を取るし、小悪魔も人間よりは食べる。

この2人で3人分を超える食事が必要となる。

パチュリーは食が細いため、この3人で4人分と言ったところか。

どこに栄養が行っているのか、美鈴が3、4人分は食べる。

彼女の職務の過激さを考えれば不思議ではないが……女性にしては多いかもしれない。

そして堤が同じくらい食べる。

余りが出れば堤と美鈴が折半して食べるので、残飯は出ようもない。

もともと潤沢な資金を持つ紅魔館だ。

今更食糧問題と言ったこともなかった。

無かったのだが。

「みんな揃ったの食事と言ったのも始めてよね」

などと、パチュリーが言うものだから。

「そうですね。レミリア様とフラン様も一緒にできるといいんですけど」

などと、美鈴が言ってしまうものだから。

「フランとは誰だ？」

などと、堤が聞く羽目になってしまったのだ。

#### 第4話『リアル』

食卓に流れる沈黙。

急速に空気は張り詰め、小悪魔なんかは味噌汁の熱さも忘れてしまった。

美鈴は『しまった!』という表情をしたまま固まり。

パチュリーは何食わぬ顔をしたまま山かけを口に運び。

残る咲夜は、茶碗を置いて頭を抱えていた。

「そうね……でもね、美鈴。お嬢様たちはこの時間、御就寝なさっているはずよ？」

「そそっそそそそうでしたね！ ええ、私ったらうつかりしてましたよ！」

美鈴の乾いた笑いに、咲夜はこれ以上の追及を諦めるほかない。

もともと、美鈴はフランの幽閉を快く思っていない。

ことあるごとに、とまではいかないが、それなりの頻度でフランを地下牢から出そうと陳情する。

レミリアのみが反対で、咲夜もパチュリーも小悪魔も条件付き賛成という段階だ。

美鈴はわざとフランの名を出し、堤に興味を持たせて接触させようとしている。

そういうことも考えられる。

そして、その提案に対して明確に反対できる論理は咲夜にはない。レミリアが反対していると言え、それまでだが、彼女が禁じているのはフランの外出のみだ。

それに、レミリアは『フランを堤に合わせるな』とも発言していない。

黒に近いグレーな判断だが、咲夜は1つの決断をすることにした。

「まあ、どちらにしても頃合いよね」

その言葉の真意は、堤にのみ伝わらない。

他の3人の反応はまちまちだが、何をするのか大体理解したらしい。そして、誰もがその意見に賛成であったようだ。

特に反論もなく、皆の食事が再開された。

「堤、ちよつといいかしら？」

今度はノックを忘れない。

いや、ノックしてから待つのを忘れない。

同じ失敗を何度も繰り返すほど、彼女とて無能ではないのだ。

「大丈夫だ」

という堤の声を聞いてから、扉を開いた。

堤は、いつも通りの普段着を着ていた。

香霖堂に行った折にもらった、外界の服である。

上下一体となった、つなぎという名称の服。

真っ赤に染め上げられたそれを身に纏い、いつものように堤は仁王立ちしていた。

仕事用の服を着慣らしておくという名目で、ここ2、3日、堤は外界の服を着ている。

とはいっても、それは基本的に同じ衣類に分類されるものだった。

『つなぎ』という名前の、上下一体の作業服。

外の世界にいた時もこれを着て作業していたから、愛着があるのかもしれない。

初日にこれを着てきたとき、咲夜は難色を示した。

確かに作業着として効率はいいだろうが、デザイン性は低い。

モスグリーンのそれは、味気と言うものが全く感じられない。

同じくレミリアもそれを指摘したところ、翌日は赤いつなぎを着てきた。

それに呆れた2人は文句が口から出ず、結果として彼の赤いつなぎ姿を容認することとなった。

ハッキリ言ってしまうえば、問題はなかった。

洋館の前を中華服で守っている美鈴の存在や、咲夜のメイド服。

こういった奇抜な服の連中が多いのだ。

今さらつなぎ姿が1人増えたくらいで、何がどうということもない。

「さつき、食事中に『フラン様』という名前が出たのを覚えているかしら？」

「ああ」

「……ちょっと返事が早すぎるのが気になるが、堤が覚えているということにしておいた。

覚えていないのを誤魔化した感じがするが、気のせいだと自分に言い聞かせる。

良くも悪くも規格外な人間なのだから、いちいち気にしては心が持たない。

なので、大事の前の小事として無視して話を進めた。

「レミリアお嬢様の妹なんだけど、ちょっと気難しいところがあったね」

「ふむ」

「今日の夕方あたりに、挨拶に行ってくれないかしら」

「わかった」

やけに簡単に堤が受け入れたのは、何も知らないからだ。

咲夜としては、何かを教えるからフランと向き合って欲しかった。だが、彼に説明をしたらフランに会いたがらないかもしれないし、

無理矢理合わせたくもない。

卑怯ではあるが、黙って合わせてしまえば顔くらいは覚えると思っただのだ。

もちろん、トラブルはある程度予想できるが……ここで死んだら、どっちにしても近いうちに死ぬ。

それに、何となく堤なら大丈夫だという予感が彼女の中にあつた。

だから、フランに1人で合わせるなどという無謀なことを思いつき、提案したのだ。

過程はどうあれ堤が承諾したのだから、あとは事を進めるだけだ。地下牢（地下室と伝えたが）の場所を教え、パチュリーに鍵をもらいに行くように伝える。

そして、服装はつなぎのままの方が気兼ねなく接することができるだろうと言っておく。

それだけを堤に伝えた彼女は、あとは堤が死なないことを祈るだけだった。

その日の夕方に至るまでのことだが。

ロングのストレートの髪形をした妖精メイドから、クッキーのセツトをもらった。

ポプカットの妖精メイドからは、魔法瓶に入った紅茶をもらった。ポニーテールの妖精メイドは、火打石を堤の背中で打ってくれた。

なんというか、死に別れみたいな空気が館に漂っている。

すれ違う妖精メイドの視線は、憐みを通り越して慈愛に満ちていた。今にも『棺桶の中の花は何がいい?』とか聞いてきそうな不穏な空気が。

パチュリーからもらった護符を扉に近づけると、一瞬だけ扉が発光する。

彼女曰く、一時的に封印を解くことができるのかなんとか。要するに鍵みたいなもんだろうという堤の認識は、決して間違っていないだろう。

実際、咲夜は『鍵を受け取るように』と堤に伝えたのだ。形こそ変わっているが、鍵は鍵だと思い直した。

ただ、その鍵は内側からでなく、外側から掛けられた鍵だと言うことには気づかない。

「入るぞ」

中に入っている人物について、ある程度の情報は貰っていた。

名前は『フランドール・スカーレット』といい、紅魔館の主たるレミリアの妹に当たる人物だ。

レミリアと違い、金の髪の毛と赤い瞳、七色の羽を持つ吸血鬼だそう。

しかし、どうして地下に住んでいるのか、どういう人物かまでは聞いていない。

当然のことながら、どういう能力の持ち主かも。

結局、堤の想像するフランドール・スカーレット像はこうだ。

レミリアの髪の毛を金にして、目を赤くする。

そして、レミリアよりも少し幼そうな感じにする。

地下にいて一度もあったことないのだから、男性が苦手なのかもしれない。

紅魔館が女性ばかりという事実も、そういった推測をすることができた。

部屋に入って堤が最初に感じたのは、冷たさと薄暗さだ。

単純に空気が冷えており、照明の数が少ないから薄暗い。

いくら吸血鬼が日光を不得手とするからと言っても、少し異常であった。

現に、レミリアは夜間、ロウソクによる照明をバッチリ使っている。吸血鬼という種が『光』そのものを苦手としているわけではないの

は明白だ。

地下に行くまでにロウソク以外の光がなかったために、闇に慣れるのが早かった。

だから、彼は部屋の異常により早く気が付く。

家具らしい家具がないのだ。

机と椅子は申し訳程度においてあるが、本棚が存在しない。

それ以外には、みすばらしいタンスが1つ壁に沿って置いてあるだけ。

女の子の部屋としては殺風景にもほどがある。

紅魔館の主の妹でもある者の部屋が、このようなぞんざいな扱いと言うのは不自然だ。

まるで、囚人を閉じ込めておくような部屋。

この部屋の中には、そんな雰囲気立ち込めていた。

「誰？」

堤が紅魔館に来てから始めて聞く声だ。

幼そうな感じのする……レミリアとは違うが、近いものを感じる声。鬱屈とした感情が染み込んだ、嫌な声だった。

「ツツミ・ジヨウヘイだ。一週間ほど前から紅魔館で世話になっている」

ツツミで構わん。

続けてそういうと、妖精メイドからの手土産を持ったままその場で仁王立ちした。

と、声のした方から、確かめるような足取りで誰かが歩いてきた。身長は低く、レミリアと同じくらいだろうか？

僅かな口ウソクの光でもわかる金髪に、単色ではない羽が見え隠れする。

光が足りず瞳の色まで確認できないが、この人物がフランドールであると推測できた。

「フランドール・スカーレットか？」

その問いにすぐには答えず、その人影はもつと近づいてくる。

堤とほとんど密着するくらいの距離に来て、ようやくフ란の顔が見えた。

レミリアよりも柔らかい印象を受ける目つきで、やっぱり肌は透き通るように白い。

虚勢や傲慢さの感じられない瞳は、外見に見合った可愛らしさがある。

顔の造形なども美少女そのものであり、そんな趣味のない堤の心が揺れる。

彼女に会ってレミリアにはない何か。

きっと、それが堤の心を動かしているに違いない。

「フランでいいよ。え〜っと……ツツミお兄ちゃん」

その瞬間。

堤は言葉や論理ではなく本能でそれを悟った。

フランにあつて、レミリアにないもの。

それに連なる記憶が、堤の頭の中から掘り起こされた。

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

それは、堤が丹波文七と闘うことになる3年前。

珍しく道場の連中の飲み会に付き合った時のことである。

飲み会と言えど社交の場。

当然、趣味の合うグループ同士で固まって飲んでいた。

静かに飲みたい連中は、そういうので集まって静かに飲む。

後輩に気を使えるような連中が速攻で酔い潰れていたため、そ

う図式が出来上がっていた。

堤城平は、静かに飲みたい男である。

何か話そうにも話題がなく、聞きの一手に回るしかない。

しかも、返事は『そうなのか』や『そうか』『そうだな』などで、話す方としては面白みはない。そういうのが好きな連中は声をかけてくるが、そうでない連中は別で飲む。例外として『一方的に話すのが好き』な奴がいて、その日はたまにまそいつと飲んだのだ。

「堤さん、僕はね、妹がいるんですよ妹が!」

「そうなのか」

「もうホントにかわいくってね、毎日一緒に寝てるんですよ!」

「そうか」

「こないだのピアノの発表会なんか、妹が『お兄ちゃん……きつと見に来てね?』

なうんて言うから、ついつい堤さんの試合の応援サボって発表会行っちゃいましたよ!」

「そうなのか」

「昨日何か『お兄ちゃん、その、一緒にお風呂入る』なんて言わ

れちゃって……。

なんていうか、堤さん。俺、堤さんに勝ったら妹と結婚しようって思ってるくらいで。

ていうか、いいですよね？ 堤さんに勝ったら、俺、妹と結婚してもいいすよね！？」

「そうだな」

ハッキリ言ってまともに聞いちゃいなかったが、その会話が突然思い出された。

自分にも妹がいたら、そんな風だったのだろうか？  
フランを見て、そう思った。

『お兄ちゃん』とか言って、堤に抱きついてくる笑顔のフラン。  
『お兄ちゃん……きっと見に来てね？』とか言って、発表会に来るようにねだる上目遣いのフラン。

『おやすみ、お兄ちゃん』とか、恥ずかしそうに言ってから布団にもぐりこんでしまうフラン。

『お兄ちゃん、一緒にお風呂入る』とか、無邪気な催促をしてくるフラン。

『大会頑張ってね、お兄ちゃん』とか、心配そうな顔で見上げてく



「ジョウヘイと呼んでくれ」

「え？ 別にいいけど……本当に大丈夫なの？ ジョウヘイお兄ちゃん」

次から次へと溢れ出す涙を、堤は止めることができなかった。

今更ながら無碍な青春を過ごしてきた自分が情けなくなってきた。

中学の時、ちよつとかわいいと思ってた近所のお姉さんに告白するんだった、とか。

よく考えたら色気の絡んだ過去がこれくらいしかなかったとか。

とにかく、涙が溢れるには十分すぎる理由だった。

よく考えれば、クマみたいな工藤という男にさえ可愛い妹がいるのだ。

可愛い子が自分を応援してると思ったら、工藤を応援してると知った時の絶望感ときたら。

しかも、それが工藤の妹だなんて知ってしまった時の敗北感ときたら。

延長1回が終了した時点で知ってしまったため、延長2回目で競り負けてしまった。

とりあえず、もし帰れたら工藤を事故に見せかけて殺そう。

そんな決意したところで、堤の涙はようやく止まってくれた。

「すまない」

「あ、今度は鼻血出てるよ」

「大丈夫だ」

過剰な妄想で涙の代わりに鼻血が流れたしたが、こちらはすぐに止まった。

伊達に鼻の軟骨が残っていないだけはある。

魔法瓶を持った左手の袖で鼻血を拭くと、堤は気を取り直して用件を切り出した。

「今日は、フランと仲良くなろうと思って、一緒に遊びに来たんだ」

「え？ ジョウヘイお兄ちゃんが遊んでくれるの!？」

「ああ、お兄ちゃんと一緒に遊ぼう」

普段の彼ならここまで口数は多くないだろう。

『今日はフランと遊びに来た』『ああ』で済ます程度の会話だ。

なんというか、言葉の端々に堤の邪念を感じる。

いちいち『お兄ちゃん』と強調するあたりも、彼らからぬ計略が見て取れた。

そして、丹波がいたらこう言ったに違いない。

『堤、お前さん……笑ってるぜ』と。

歯が剥き出しでなくて微笑んでるのだが、どっちにせよ知り合いが見たら卒倒しかねない。

もしくは、堤がおかしくなったと思って救急車を呼ぶことになるだろう。

「何をして遊ぼうか？」

「えっとね、遊ぶんだったらね」

フランの次の言葉を待つ。

普段の彼なら『何をして遊ぶんだ？』と間を与えずに聞き返すところだ。

が、今は妹属性にしてやられた堤城平。

言葉を探しているもどかしい時間でさえも、彼にとっては楽しみでしかない。

この男、今ならままごとの赤ん坊役でさえ完璧にこなすに違いない。それくらい、堤は正常な判断力を欠いていた。

だから、チャンスを失ったのだ。

「弾幕じっし」

安全に逃げ切るためのチャンス。

堤城平はお兄ちゃんなのか？

太陽の代わりに月の照る時間。

人間たちが寝静まる夜こそ、吸血鬼の1日が始まるとき。

だから、従者も昼より夜に気合を入れることが多くなってくるのは必然だ。

豪華絢爛とは言わずとも、充分な威厳と高級感を持つ一室。

そこが食堂ではなく応接間だと言われても、疑う者はいないだろう。だからこそ、壁際に不自然に設置されているアナログテレビの存在が際立つ。

その一室にあるアナログテレビが、厳かな雰囲気をブチ壊していた。

そこで食事をする者たちも、その館の主も気にはしない。

今、食堂と茶の間を兼ねている部屋で茶を楽しんでいるのは、レミリアとパチュリーの2人だけ。

美鈴は先ほど休憩を終えたばかりだし、昨夜は年中働いているようなものだ。

たまにレミリアと茶を飲むこともあるが、パチュリーの手前でそれはない。

レミリアは今日も今日とて、優雅な雰囲気を出せるように必要以上に尊大だった。

無論、必要性がないので尊大な態度の行き先がない。

ただそこに偉そうに座っているのは、まるで無能な王のようではない

か。

それに自発的に気付いたからかは知らないが、口元に運びかけたデイーカップを置いて口を開いた。

「咲夜。ツツミはどうしたのかしら？」

話題自体は何でもよかった。

たまたまレミリアの頭の片隅に堤城平のことが思い浮かんだただただ、そのたまたまが昨夜の肝を冷やしたのも事実である。

「はい、少々部屋の方で色々してもらっております」

レミリアが紅茶を嗜む傍らで、咲夜がいつもの従順の手本のような態度で答える。

相も変わらず面の皮の厚いメイドだ。

具体的な内容まで話せないため、大分ぼかしてはいるが。

ここで主に嘘をつかないというのが、十六夜咲夜の美点の1つかもしれない。

もちろん、嘘をつかないだけで真実を語ったわけではないが。

「……具体的にはどういうことよ？」

訝しげな視線でメイド長を見る。

付き合いが長いだけあって、不審に思ったようだ。

確信には至っていないが、何か隠していると感じたらしい。

「レミイ、野暮なことを聴くもんじゃないわよ。

ツツミだって男なんだから、一週間もすれば溜まったり溜まらなかつたりするものよ」

「……ああ、それもそうね」

正直よくわかっていないが、知識人のパチュリーの忠告を聞いておくのが無難だ。

そう判断し、咲夜の焼いたクッキーに手を伸ばす。

紅茶の味が殺されないように、やや甘さを抑えたクッキーである。

それでも、レミリアの間食としては十分な味だった。

だから、というわけではないのだが。

レミリアの考えが浅かったのは、言うまでもない。

第5話『堤城平はお兄ちゃんなのか?』

弾幕ごっこを挑もうとしたフランだったが。

堤の右手にあるクッキーの箱と、左手に持っている魔法瓶に気がついた。

ロングのストレートの髪の毛の妖精メイドが、たまに差し入れてくれるクッキー。

それと、ボブカットの妖精メイドが、内緒で紅茶を持ってきてくれる時に携行してる魔法瓶。

その2つが目についたフランに気がついた堤は、せっかくなので間食を取ることを提案した。

で、妖精メイドたちから貰ったクッキーと紅茶で一息入れたあとのこと。

ようやく話は、弾幕ごっこへと戻り始めていた。

「え？ お兄ちゃん、弾幕ごっこ知らないの？」

「すまんが、聞いたことがない」

幻想郷の基本ルールの1つである弹幕ごっこ。

妖怪と人間の差を埋めるための取り決めである。

割と最近では『萃夢想ルール』などの変則形式のものも考案されたが。

それでも尚、元来のルールが『弹幕ごっこ』の代名詞であった。

もちろん、フランの指す弹幕ごっこも元来のルールに基づくものだ。

「えっと……弹幕ごっこっていうのはね」

少女説明中

「というわけで、人間と吸血鬼でも平等に遊べるの！」

「なるほど。フランは説明が上手だな」

そう言って、彼はフランの頭を撫でてやる。

妖怪と人間のパワーバランス云々については知っていた。

絶対数よりも個々の能力からして人間が不利だが、妖怪にも人間が必要である。

常に妖怪が勝ってしまつては、人間はいずれ滅ぼされてしまう。

つまり、様々な不平等を少しでも減らすための案が『弹幕ごっこ』

なのだ。

「だが、すまない。俺は弾幕を作れないんだ」

「えゝ！」

頭を撫でられて気持ちよさそうにしていたフランの顔が、突然の悲報に歪む。

泣きそうな顔になってフランを見て、堤も居心地が悪い。

フランが駄々をこねてくれればあやしたりという選択もあるが、フランは哀しそうに俯いただけだ。

堤もどうしようかと考えあぐねていたが、

「お兄ちゃんと弾幕ごっこ……したかったな……………」

と、フランが少しだけ拗ねたように言った。

その言葉と仕草が、妹属性に染まった堤の胸を打った。

どうにかしてフランを満足させてやりたい。

その思いが、工業高校をギリギリ卒業したレベルの彼の頭に名案を与えた。

「フラン、こういっのはどうだ？」

---

変則ルール、弾幕鬼ごっこ。

堤城平は弾幕を作ることができない。

つまり、従来のルールではフランに対してダメージを与えられない。また、飛行もできずスペルカードも持っていないため、ゲームが全く成立しない。

この事態を避けるための折衷案が『弾幕鬼ごっこ』である。

フランは通常の弾幕ごっこと同じく、堤に対して弾幕を張る。

ただし、空は飛ばないという条件付きだ。

堤は弾幕を通り抜けてフランに触ればよい。

1度触れる度にゲームを一旦終了し、堤は開始位置に戻る。

それを確認してからフランが弾幕を張り、次のゲームを開始する。

そして、ゲームをより公平にするために、今回はスペルカードを使用しない。

5回クリアした時点でゲームは終了、堤の勝利となる。

しかし、ゲーム中に堤が被弾した場合はどうするのか？

それについては、堤が倒れるまで勝負するということでご合意となった。

つまり、被弾しても倒れない限りは敗北ではないのである。

ルールの取り決めが30分ほどの時間で済んだのは、フランが妥協したからに他ならない。

いくら彼女とて、一方的になぶって遊ぶ趣味はあまりない。

標的は反撃してきてこそその標的で、出来る限り公平な条件で勝負したいのだ。

もちろん、能力的な差異に関しては仕様がなない。

これは、個々人の天性のものや努力による差であり、それを楽しむのも醍醐味である。

ルールによる不公平が、彼女にとって最も遊びをつまらなくするものと言えた。

場所は、先々月に完成したフラン専用の弾幕練習所だ。

ぐずっては部屋を破壊していたため、下手に修理するより頑丈な部屋を作る方がいいのではないか？

そういう話が一部妖精メイドから持ち上がり、咲夜の決断とレミリアの許可で作られた。

内側に効果のある結界によって、フランの弾幕の威力は若干落ち、壁に被弾しても壁が壊れない。

全力を出すと流石に紅魔館が揺れるが、その揺れも微細でたいしたことはないと判明している。

まあ、フランと堤が遊ぶにはちょうどいい場所であるとも言えた。

「じゃあ、行くよー！」

「よし来い！」

距離にして30m程度だろうか。

フランが堤に対して、割と突破が簡単な弾幕を張る。

小手調べということもあるし、堤に簡単に壊れられても困るからだろう。

避け方は非常に簡単で、斜めに走ればそれだけでかわせるような単純なものだ。

もちろん、走る速度に注意せねばならないが、気を付ければ歩いてもかわせる速度だから問題ない。

しかし、堤はフランの予想を大きく裏切った。

斜めに走るところか真っ直ぐ向かってきたうえに、細かくジグザグに走ってきたのだ。

真正面にいたら直撃するはずの球を全て避け、最短距離を最速で迫ってくる。

そして、あっという間にフランに柔らかくタックルを決めてしまった。

堤城平。

この男、その動体視力を以って学生時代は弾幕系シューティングに興じていた時期もある。

無論、空手が第一ではあったものの、たまの休みなどは財布片手にゲームセンターに行っていた。

なかなかゲームオーバーにならないため、不良に絡まれたのも彼にとってはいいい思い出。

そうすれば、確実に懐が温くなるのだから。

つまり、イージーモードレベルの弾幕など、彼の足元に遠く及ばない。

「うわあ！ お兄ちゃんスッゴイ！」

笑顔の堤に高い高いをされながら、フランは素直に喜ぶ。

『イーजीじゃ話にならない 本気出せる』と短絡的に考えて。

そんな彼女だからこそ、一気にハードモードまで試そうと思ったのかも知れない。

少し名残惜しそうに開始位置に戻る堤の背中を見て、フランはサデ  
イステイックな笑みを浮かべた。

「……咲夜。何か騒がしいとは思わないのかしら？」

「ツツミによく言い聞かせておきます」

当然だが、レミリアが怪しみ始めた。

そりゃそうだろう。

さつきから継続的に紅魔館が揺れているのである。

しかも、地震の類と言うよりは、爆発や衝撃による揺れに感じられる。

いくらなんでも、その程度のことろが分からないほどレミリアも愚かではないのだ。

「案外、レミイのことでも考えながら七転八倒してるんじゃないかしら？」

口元を少しだけ歪める様な、意地の悪い笑顔で言い放つパチュリー。

「それは、複雑ね」

苦虫を噛み潰したような、そんな表情で一言。

それ以降、しばらくの間、レミリアは堤のことを考えるのを放棄した。

同時に、この揺れの原因に関しても忘れようとしたのは、パチュリ  
ーの言葉の賜物に違いない。

| |  
| |  
| |  
| |  
| |  
| |  
| |  
| |  
| |  
| |

フランの顔に浮かんでいるのは、外見不相応な妖艶な笑みだった。  
既に4回目の敗北を喫し、あと1回の敗北で彼女の負けが確定する。  
そんな状況だからこそ、楽しくて楽しくて仕方なかった。

既にルナティックになっている弾幕だが、堤城平はまだ立っている。

無論、無傷ではない。

顔面はボッコボコになっているし、つなぎの下もアザだらけだ。  
打撲の数こそ少ないものの、1つ1つのダメージが大き過ぎた。

被弾すること11回、ピチュンせずに耐え切った彼の体の構造はい  
かほどのものか。

とりあえず、フランドール・スカーレットの要求に応えられるレベ  
ルだったのは間違いない。

何より、かつてないほど堤の闘争心は燃え上がっていた。

……丹波が見たら、愕然としそうなほどに。

「いくよー！ ジョウヘイお兄ちゃん！」

彼女らしからぬ気合いを乗せ、フランは弾幕を放つ。

イージーモードとは比べ物にならないほどの密度と広がり、そして緻密さ。

これらの要素が、堤城平を無傷では済ませなかった。

スペルカードなしといっても、簡単に突破できる弾幕ではない。

「っしやあああああああ！」

それほどの盛り上がりを見せる中でも、堤の目的は確かだった。

目の前の弾幕の突破が目的だったか？

弾幕に直撃しても倒れないのが重要だったか？

もちろん、そうではない。

堤城平の目的は『フランドール・スカーレットと楽しく遊ぶこと』だ。

加えて、可能なら『フランの頭をさりげなく撫でること』も目的の1つである。

すでに2回撫でているが、あと1回は撫でておきたいとか考えている。

……こんな姿を松尾象山に見られたら、確実に破門になる気合の入  
り具合だ。

迫りくる弾幕を見てはいない。

放たれた瞬間に、ある程度の予想はできていた。

流石にフランも学習したのか、直線コースの弾幕は厚い。

いかに堤が頑丈とはいっても、正面突破で耐えられるものではない。彼の残りの体力から考えて、5発の直撃までならどうにかといったところだ。

堤が向かったのは、左の壁際だった。

比較的ダメージの少ない右半身を盾にすることで、弾幕を突破しようというのだ。

最低限の回避は行うが、もはやフランの弾幕は堤の技量を超えている。

ある程度は当たることを前提に考えねば、敗北は必至であった。

12発目の衝撃は、堤のレバーを襲った。

罌人間・工藤に匹敵するほどの一撃の重さ。

もし堤が斜腹筋を鍛えていなければ、今の一撃で肝臓が破裂していただろう。

現に、今も破裂こそしてはいないが、堤の体が途端に鉛のように重くなった。

彼ほどの猛者を一撃で追い込むほどの威力が、フランの弾幕には秘められている。

だが、堤もただ打たれているわけではない。

弾幕に当たったときの反動を利用して、再びダッシュするタメを作り出す。

足をキツチリと踏みこらえ、膝のバネを利用して力を溜める。

直撃した弾幕が霧散した瞬間、堤の体はカタパルトで射出されたように弾けた。

直線には走らない。

今、サイドステップを繰り返しながら……横の移動の繰り返して弾幕を避ける。

隙を見つけては少しだけ進み、決して焦って直線的な動きはしない。

が、次の衝撃は堤の予想していなかったところから来た。

その弾幕は部屋の端まで行ったところで反射するように戻ってきて、堤の背中を打ったのだ。

予想外のその一撃に、堤のスタミナは削ぎ落される。

KOされないように歯を食いしばったものの、そのダメージは大きい。

もはや、あと1度の直撃に耐えられるかどうかと言ったところ。

たったの一撃で、ここまで追い込まれてしまった。

しかし、堤もただでは転ばない。

後ろからの衝撃を利用し、賭けに出た。

弾幕というものは、通常3次元構造をしている。

でなければ、飛行できる連中からすれば上下に簡単に避けられてしまうからだ。

今回はどうだろうか？

飛行できない堤城平という人間を相手に、フランが3次元的な弾幕を張るか？

無論、否。

フランドール・スカーレットは、平面上に弾幕を張っていたにすぎない。

堤に対して、立体的な弾幕を張る必要性がなかったから。

堤は、その隙をついた。

大きく弓なりになった体で、勢いよく丸まるようにして前進のエネルギーの足しにする。

熊に殴られるような衝撃をもった弾幕に逆らわず、そのまま吹き飛ばされる。

上方向に逃げることで、一時的に弾幕から逃れたというわけだ。

一気にフランのところまで行きたいが、まだ少しだけ遠い。もちろん、堤はそこまで予想していた。

予想と言うよりは、本能に近いものだったのかもしれない。

フランまで、あと8mほど。

彼は弾幕を両足で踏み込み、尋常ならざる跳躍をした。

そして、一気に8mの距離は縮まり。

やや崩れ落ちるようになして、なんとかフランに抱きついた。

「俺の、勝ちだな」

その顔は腫れていながらも、清々しい笑みを浮かべていた。包容力と温かさを持ち併せながら、力強さを秘めている。

笑顔を向けられた者に安心感を与える様な、そんな笑みだった。

そんな笑みが向けられるのは、フランにとって初めてのことだった。ほとんどの者は彼女のことを恐れ、笑みさえ向けてくれることはない。

メイド長の十六夜咲夜の笑みは、どことなくぎこちない。

門番の紅美鈴の笑みは、優しいが堤のそれとは質が違う。

パチュリーに至っては笑顔を見たことがないし、実姉のレミリアともあまり会っていない。

過去にココに來た霧雨魔理沙の笑顔に近いが、それとも何か違う。

その笑顔に、フランは身動き一つ取れなかった。

驚きと興味と嬉しさと疑問。

様々な感情が入り乱れ、過ぎてきた時間に不相応な精神を掻き乱す。

混乱に陥るところであったが、そんな彼女の頭に武骨な手が乗せられる。

その手で撫でられると、不思議とどうでもよくなった。

深い安心感に包まれながら、彼女も堤の首元に両腕を回した。

「ということがあった」

小悪魔に擦り傷の消毒をされながら、頭を抱える咲夜に堤は全てを話した。

満身創痍もいいところで、骨折している箇所がないのが不思議なくらいである。

つい、2時間前のことである。

あまりに地下が騒がしいため、レミリアもフランに何か関係したところだと思いつたらしい。

美鈴に見に行かせたところ、そこには萌え尽きた堤と満足げなフランがいた。

幽閉の原因たる扉が開いたにもかかわらず、フランは飛び出す様子もなく。

ただ、楽しかったと笑顔で伝え、堤を美鈴に手渡した。

美鈴は美鈴で、気配を殺しながら地上の階に戻り、堤を客間に押し込めた。

レミリアの追及には『妹様が癩癧を起してしまして……』と適当に話を付けた。

無論、堤の不在を怪しんだレミリアは彼を呼んだが。

先ほどと同じように『堤はお楽しみ』的なことを咲夜に伝えられ、しぶしぶと追及を諦めた。

で、美鈴の独断で小悪魔に消毒と包帯、ガーゼを用意させて治療していた。

そこに茶菓子の片付けに来た咲夜が通りかかり、今に至るといわ

けだ。

「ツツミ、明日からの仕事に支障はないかしら？」

「大丈夫だ。だが……」

どこか遠くを見つめて、堤はゆっくりと口を開く。

何かを悟ったような顔は、何か常識を超えたものを感じさせる。

咲夜も、美鈴も、小悪魔も。

誰もがそれを感じた為に、堤が想いを口にするまで動きを止めた。

「フランの頭をどれだけ撫で撫でしたか、確認しておきたかった」

この男は、絶対に紅魔館から出してはならない。

3人が固く誓い、お互いに確認し合う。

必要以上に結束の固くなった紅魔館だが、近い将来知ることだろう。  
堤城平という男の愚直さ、力強さ。

そして、この男がいかにかに我を通す男であるかを。

白玉楼の侍 / 紅魔館の餓狼

凛々しい顔の男と、見目麗しい女。

身長差が少々広いが、それでもなお、美男美女というのは映えた。その2人の両方が腰に刀を刺し、男は安袴で、女は緑を基調とした洋服で闊歩していても。

女の横には人玉が浮いており、男の左腕は青白く生氣に欠けた色だ。

男の方が荷物持ちらしい。

『E c o B a g』と表記された、薄茶色の布袋を2つ左手に提げている。

その大きさ、膨らみ具合から察するに、決して軽くはないだろう。だが、男は顔色一つ変えずに袋の取っ手を握りしめている。

女の方はというと、手持無沙汰に後ろに組んだ指を弄んでいた。

男の方をちらと見ながらも、やはり同じように歩くだけだ。

真っ直ぐ前を向いて歩き続ける男に何か言いたいのだろうが、それさえもおぼつかない。

それから5分経って、ようやく女が口を開いた。

「あの、1つくらい持ちますよ?」

「構わん。指の鍛錬になる」

それは間違いないのだろうが、女の気遣いは男に届かなかった。

少ししよげた顔になった女だが、申し訳なさそうな顔に早変わりする。

そんな表情のまま、また男に気を遣うようなことを言う。

「源之助さん、あまり無理しないで下さいよ」

「わかった」

女……魂魄妖夢は知らない。

男……藤木源之助の双眸が爛と輝き、感情の高ぶりのあまり鼻血が出そうになっていることを。

第6話『白玉楼の侍 / 紅魔館の餓狼』

「あとは、フラン様に洋菓子でも買って行きましょうか」

「そうだな」

堤城平が紅魔館に来て40日ほど。

フランとの『弾幕鬼ごっこ』から、1カ月ほど経ったときのことだ。その後、堤の妄言は一度も確認されなかった。

フランと遊んだ際の傷も2週間ほどで完治し、かなり重たいものを運ばされていた。

最大で280kgのピアノを運んだが、壁にもぶつけず1人で運んで見せた。

毎日の重労働にも文句1つ言わずに働く忠臣に、レミリアが買い出しを命じたのだ。

気分転換を兼ねてのことと、緊急時の買い出し要因として道を教えておくためである。

レミリアとパチュリーはともかく、小悪魔も咲夜も人里に気軽に買い物と言うわけにはいかない。

特に、咲夜はメイド長として館内を仕切らねばならず、そうそう館を開けられない。

よって、新入りの堤にその役目を託そうと考えたわけだ。

そして今日。

美鈴は堤を引き連れて人里に来ていた。

たまの休みに中華料理を食いに来たりしている美鈴なら、人里にもそこそこ詳しい。

加えて、今日は珍しく魔理沙が本を正当な手続きの下に借りに来たので、門番が不要だった。

門の前までノリノリだった魔理沙が、突然幕を降りて『本を借りに来た』と言った時はビックリしたが。

とにかく、暫定で一番厄介な危険がなくなったので、今は代わりに

小悪魔が門番をやっている。

「えっと、何を買っていきましようね」

「痛みにくいものもいいが、生菓子も食べさせてやりたいな」

なんとか会話できるようになってきた、と思う美鈴である。

最初は何を考えているかわからなかったが。

だが、彼の行動を見て、すぐに『何も考えていないことが多い』と分かった。

会話しようと思えばできるようで、最低限のコミュニケーションはとれている。

ここ最近、武術の話なんかもしたりして、いよいよ同僚らしくなってきたところだ。

フランの話で盛り上がることもあり、少しばかり親近感を持ったりもしている。

「ケーキってわけにはいきませんよねえ」

「タルトかパイあたりなら大丈夫じゃないか？」

そこまで会話が進んだところで、堤の視線が2人組に移った。凜々しい男と、可愛い女の子の2人組だ。

腰の刀やら人玉やら不可思議なところはあがあるが、幻想郷ならよくあることと思っていた。

事実、小悪魔は羽や尻尾が生えているし、チルノだってよく見れば羽のようなものがある。

今さら、人玉ごときでは堤は動揺しなかった。

「桜餅は前回買って行きましたから、今回はどうしましょうか？」

「芋羊羹なら、幽々子様も喜ばれよう」

堤たちと似たような会話をしていた2人は、彼らに気付いたらしい。見知った顔であるし、無碍にするのも失礼だと思ったのだらう。足並みをそろえて、2人は堤らの元へと歩いてきた。

「ああ、美鈴さんじゃないですか」

「お久しぶりです。いつも宴会ではお世話になっています」

これはこれは、と言わんばかりに2人とも頭を下げ出す。もともと腰の低い連中であればこそだらう。

普段はあまり話さないが、いざ話し出すとそこそこ話が続くのだ。

2人とも、庭を任されているという共通項があるからだろう。

「藤木源之助にござる」

「堤城平だ」

こちらはこちらで、無口で朴念仁という共通項がある。

お互い表情が変化しないため、今すぐ殺し合っても不思議じゃなさそうだ。

藤木はすぐに抜刀できるだろうし、堤も戦いの機微に関しては聡い男だ。

どちらか仕掛けてもおかしくはないが、どちらも仕掛けることはなかった。

その程度の常識は持ち併せている2人である。

「そうだ、時間があるなら、少しお茶しませんか？」

「そうですね、たまにはいいですよね」

「ふらんどーる・すかあれつと？」

「紅魔館の地下に住む……レミリアの妹だ」

フランに思い当たりはない藤木だが、レミリアは見知っていた。  
日傘の下で宴会を楽しんでいる、吸血鬼と呼ばれる存在。

年齢以上に幼い外見と言うことから、妙に記憶に残っている。  
堤が、そのレミリアの妹のことを『とってもかわいい』などと称す  
のだ。

流れかけた冷や汗を拭いつつ、藤木は聞かずにはいられなかった。

「それなるは幼女ではござらんか」

「ロリコンじゃない」

ちよつと早過ぎだ。

『幼女』の辺りでもう否定し始めているのだ。  
もしかしたら、本人も自分の性癖に薄々気づいているのかもしれない。  
い。

空気が妙になっているのを藤木も感じたのだろう。

何か話題を変えねば、そう思って話題を提供したに違いない。

口下手な彼が口にしたのは、彼と堤が共通の話題として知っていそうなもの。

以前、腕試しに殴りこみに行った紅魔館の住人の話だった。

しかし、彼が知っているのは、自分が倒した小悪魔と、門番の紅美鈴。

それと、同じく妖夢と親交のあるメイド長、十六夜咲夜である。

小悪魔のことはよく知らないし、美鈴はそこにいる。

よって、彼が話題に選べるのは、咲夜以外にはなかった。

が、咲夜に関しても、藤木は詳しいわけではない。

とりあえず、噂や盗み聞きしたことから話題を捻りだすことにした。

「紅魔館のメイド長は、確かツンデレであつたな」

藤木にとって、これは唯一無二と言っていい情報であつた。

メイドの話など今更だし、美脚がどうこう言つとセクハラになりかねない。

PAD疑惑に関しても、紅魔館を敵に回す可能性から口にすることはばかられる。

この程度の話題なら、無難と言えば無難なのかもしれない。

だが、藤木は知らない。

堤城平という男が、いかにコミュニケーションが不得意かということ。

「そうだ」

短く返して、それで終わり。

普通だったら『どこがツンデレであるか』など話題が広がりそうなものだ。

違うにしても『本当はこういう性格なんだけど』とか、話しようはいくらでもある。

しかし、堤城平はそんな男ではない。

必要な情報を手短かに伝え、最速で話を終了させる。

特に、男相手とあらば、必要以上に会話をしない男と進化していた。しかし、堤にも手心はある。

微口りの妖夢とも仲良くなるため、藤木ともそこそこの親交を持つことにした。

「俺もツンデレが怖い」

「さやか」

返せる返事が、それしかなかった。

というか、それが精いっぱいだった。

そもそも藤木はツンデレ好きではない。

『も』などと言われては、対応に困るのも当然のこと。

藤木源之助が好きなのはツンデレではない、クーデレだ。

藤木源之助が400年のうちに得た技法の中に『聞き流し』という技法がある。

これは、あたかも相手と会話しているかのように見せかけるのが常であり。

その実、話すだけ話させて自分は聞かないと言う性質を持つ。

稗田に『藤木源之助が聞きに回ったら用心せい』と伝えられるほどだ。

だがしかし、今宵の相手は餓狼。

一介の人里の民どころか、稗田と比べても勝るやも知れぬ存在。藤木の『聞き流し』は、大きく空振っていた。

「チルノを知っているか？」

「氷精のことでござろう」

「チルノと遊ぶのに必要なのは、飴玉と昼食、そして根気だ」

こんな感じの会話を、女性2人が会話の終わる1時間近い時間聞き続けた。

その藤木の心境はいかほどのものか。

これが、堤城平と藤木源之助の初めての邂逅である。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8764/>

---

東方餓狼死狂伝

2010年10月10日14時27分発行